

女
舞

円地文子
秋元松代

講談社



女
舞

昭和四五年五月一二日 第一刷発行

著 者 円地文子・秋元松代

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二二

郵便番号 一一二

電話 東京(942)一一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 星野精版印刷株式会社

製本所 有限会社馬場製本

定価 三八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© 円地文子・秋元松代 昭和三五年

女

舞

装帧
川田
幹

浜村千弥は二年前、浜村流の家元を嗣いだ若い舞踊家である。家元の一人娘に生れて本名を香代と云ったが、父の男名前を襲名して浜村千弥と名乗った。

二十六歳の若さと鎔木清方の美人画に似た艶麗な美貌の持主だったが、浮いた噂ひとつなく、専ら芸に精進していたので、父の修平初め周囲の人々は、彼女の将来に大きな期待をかけていた。

その年の冬もようやく過ぎた頃から、毎年催される流儀の発表会が、五月頃にあるだろうという弟子たちの早耳の取沙汰から始まって、早くも企画や打合せが始められた。舞踊家たちの間で、発表会といえは全く採算を度外視した行事で、各々の流儀の面目と威信をかけての催しである。だから経済の面での破綻や発表作品の不評判から、思いもよらない敗退を余儀なくされた舞踊家もあったし、またその正反対の結果もあった、一挙に浮かびあがる家元もあったのである。こと

に若くて野心家の踊り手たちは、演目の中にかならずと云つてもいいほど、新作舞踊の一幕を加えることを、誇りとも思い、新しい門弟たちを吸収する唯一の妙手とも考えていた。

しかし千弥の父の修平は、それを新作騒ぎといつて、流儀の踊もろくにこなしていない者がと、苦がい顔をする方だった。だから千弥が、今年の発表会にはぜひとも自分に新作舞踊をやらしてくれと切り出した時も、すぐには賛成する筈もなかった。

「新しがりなんかじゃないんです。私も四つの時から踊り始めて二十年以上やってきたんですから、この辺で自分のものを見つけないかと思うんです。私、二三年前から、自分ひとりの工夫で考えて来たことなんですけど、お能の手をとり入れて、新作を創ってみたいと思うんですけど」

「お能か。お前さんがまめにお能拝見に出かけていたことは知ってるが、元来踊にはお能の手が沢山入ってるんでね、かえって難しいんだ。前にもそういうことを考えた師匠たちはいやというほどいるんだが、たいていはしくじった。仰々しいばかりで、面白くもなんともない」

「だから私が失敗するとは限らないでしょう。私のもう作曲はどなたに、作詞はどの方につて、そこまで考えていたんです」

「能の何をとるつもりなんだ」

「はながたみ——」

「花筐か。——ちよつと甘いな」

「甘くなんかありませんわ」

そんな押問答が何日か続いた末、結局は修平が押切られた形で

「じゃ師匠には誰をと云うんだ」

「西川昌三さん」

「あれか。お前さんも相変らずの一流好みで、高級品でなけりや氣に入らないんだ。しかし西川の若太夫は芸は親まさりの名人だが癖の強い男だそうだから、教えて下さいと行つても、ああよろしいと云うかどうか。玄關払いかも知れないな」

「まさか。——行くだけは行つてもいいんでしょ。やらして下さるのね」

「行つてもいいが、西川は素行のおさまらない男だそうだから、氣を付けてもらいたいね」

「そんなことはどうだっていいじゃありませんか。私

は西川さんの芸をとりたいたんですもの。やれますから大丈夫——」

一度こうと云い出すと、千弥は持前のふんわりと柔かな云い方だが、自分の欲しいものは手に入ると思ひこんでいるところがある。人に褒められながら育ち、美貌と芸で人氣を集めている千弥は、まじめに望んでいることなら叶う筈だと決めていた。

西川家では毎月内輪の者だけを集めて仕舞の会を催していた。千弥は伝手を求めてその案内状を手に入れた、かたがた自分の内意を申入れた。

西川家は古い能楽師の宗家として、明治以後も大名華族の五条家の保護をうけていた。牛込左内坂に登り切った邸町の中でも、西川家の構えは宏壮なものだった。

千弥は奥深く静まった植込みのあいだを、若い内弟子の朝弥をうしろに歩いて行きながら、氣負い立つ自分の思ひを見られまいとした。それが一層彼女の瑞々しい顔立ちを引立て、あふれるような若さを匂わせていた。

「お師匠さん。あすこにどなたかいらっしゃいますわ」

と、朝弥が小声で注意した。

千弥が前方をみると、庭木の枝が揺れて、無造作にふところ手をした男の姿がみえた。男は千弥よりも前に、この若い女に気付いていたようである。男はほとんど表情も動かさずに、冬陽のもれる庭木の中に立っていた。

千弥はつとめて自然な姿勢を意識しながら男に近づく

「西川先生でいらっしゃいますか。初めてお目にかかります。私、浜村千弥と申す者でございますが……」

「浜村、千弥？……」

「伺ってもいいというお許しを頂きましたので……」

「ああそうか。玄関の方へ行って下さい。誰かいるでしょう」

西川は投げやりに云い捨てると、庭木の繁みをくぐって姿を消してしまった。ふところ手を直そうともせず、じろりと自分を見たばかりの男の顔が、千弥に不思議な印象を残した。美しいとほめそやされ、愛想笑いの中にばかり生きて来た千弥は、こういう男に出会

ったことがなかった。あの人は、と千弥は思うのだった。女をみる時も壁や天井をみる時も同じような目つきで眺めるにちがいない。それにしても変な相手に出会ったものだと思った。彼女がそれまでに何度か見た西川の舞台から、彼女が勝手に作りあげていた能役者の西川昌三とは別人の感じだった。

西川邸の能舞台は、母屋から離れた奥庭にあつて、集まった人々は仕舞の始まるのを待つあいだ、庭を歩いたり茶をたてたりしていたが、千弥は人々の目がそれとなく自分の上に注がれているのを意識していた。彼女は自分の美しさに心がくつろいで、鷹揚に坐っていた。

「お師匠さん。あの柱によりかかっていらっしゃるのが、五条様ですね。おとなりがお嬢さまでしょうか。でもお嬢さまにはお年が行ってらっしゃるようですね」

朝弥はもの珍しく、小声で千弥に話しかけた。千弥もここへ坐った時から、五条公爵のとなりに坐っている権高な美しさを持った、令嬢とも若夫人とも判断のつきかねる一人の女性が、何か執拗な視線を千弥に向けているのに気付いていた。

仕舞の会が始まった。何番かの演目が進んで、西川の狸々が演じられた。黒の紋服に袴をつけた西川が決まりの位置についた。その西川をみた時、千弥はまた新しく不思議な感じに打たれた。舞手は最初の動作を起す前の一瞬を、ほとんど呼吸さえしていないかと思われるほどの静かな強さに充ち、水の上に浮く鳥のように柔軟で高貴な雰囲気をもとっていた。それは最前、植込みの中でみた、やくざ者めいたふところ手の男ではなかった。

あの人の目は、とまたしても千弥はつぶやくのだった。どこを見ているのだろう。何を見ているのか分らない目だ。何か遠くの方の形も姿もない、ほの暗い何かをみている。私や私たちをずっと通り越した、言葉で云えない遠いところのものを見ている男だ。——でもそれがどうしたと云うのだろうと、千弥は西川の舞の動きに注意を向けた。

西川昌三は千弥よりは六つ七つ年上だろうと思われる。年輪が芸の深さと美しさを加えてゆく伝統的な象徴芸術の世界には珍しく、家に流れる濃い血が時ならず、この若木に爛漫と花咲かせたように、西川の芸はその道の古老にさえ、天才だと歎称されていた。こと

に「鷺もの」がよく、「羽衣」のシテなど、橋がかりの一声から、そのさびのある美声と高雅な姿が人々の心をうばった。

会の終ったのは夕刻近かった。

客たちがほとんど席を立って、千弥はがらんとした拝見席に残されたかたちだった。かねて自分の希望は申入れてあるのだから、何か西川から挨拶があるだろうと待っていたが、小半刻も経ったが誰も現われてこなかった。若い朝弥は不満そうに

「どういうんでしよう、放りっぱなしなんでしようか。忘れていらっしゃるのかも知れませんが、私、どなたかみつけに行ってみますわ」

「もう少し待ってみましょう。ざわざわすると、はしたないと思われてよ」

「そうでしょうか。だつてずいぶん悠長すぎますわ」
「何か御用がおりになるのよ。もうじきいらっしゃるわ」

鷹揚に育った千弥は、自分が忘れられたかも知れないなどとは思ひも及ばない。それよりも、あの何となく得体の知れない西川が、いずれ返事をしに来ると思ふと、待っているのが少しも長くは感じられなかった。

朝弥がまた何か云いかけてやめた。西川がぬつと拝見席の後方から入って来たからである。

「どうも。——忘れていったん外へ出てしまったんです。もう待っていないかと思つたが」

西川は立つたまま千弥を見下ろしていた。この男が先刻仕舞を舞つた同じ男かと思うほど、西川の顔にも態度にも無頼な感じがあつた。彼は千弥の希望を聞いているのかいなのか分らないような顔で聞き終ると「来たいというなら来てもいいですよ。僕が直接教えるわけにはいかないが、うちにも相当出来る人がいるから、あなたに向きそうな人を考えておきます」

「私は先生からお教えを受けたいと存じて伺いました。御無理でも枉げてお聞入れ頂きたいのでございますが……」

「時々あなたのような人が舞込んでくるんで、いちいち僕が教へてはいられないんだ。それに私の方でいやになる前に、向うでやめてしまふしね」

「私はそんなことは致しませんわ。私は——」

「あなたは踊の師匠だそうですが、能から何を覚えるつもりなんですか。大して得るところはないような気がするな。自分の流儀をせいぜい踊りこんでおく方が

いいんじゃないかな。——しかしまあ、折角きたんだから、二、三回通つてみますか」

西川はもう席を立つていて、千弥は礼を云うことも出来ず、その後姿を見送つた。

彼女は家へ帰ると、父にはただいまと云つたきり、自分の部屋へ引きこもつてしまつた。西川昌三の、あのブロンズのような肉のない引締つた顔と、何物にも興味をつないでいないような態度の中にただよう高貴な雰囲氣がまだ千弥をとらえていた。そして同じ西川が舞の動作を起す前の一瞬に示した、あの強さと深い静かさを思い出すと、千弥は新しくゆすぶられた。あの人は、西川家という古い能役者の血が何代も積みかさなつた末に咲いた狂い咲きの花のようなものかも知れないと、千弥は思つた。なんのために生きているのか分らないような顔をして生きている上品なやくざ者、つまりそういう人なのだと、彼女は決めつけるような勢いで、自分にまつわりつく西川の印象を押しのけた。

「西川とはどんな話合いになつたんだ。向うは承知したのかい」

「ええ。きたければ来てもいいって」

父の修平が様子をききに来た。稽古をつけていた弟子たちが帰ると、早速やってきたのである。

「つまり承知したわけなんだな。どんなあしらいだった。——向うも家元だが、おまえさんだって浜村流の家元なんだ。妙な云い方をするようだったら考え直した方がいいね」

「別にそんなことはありませんでしたわ。明日からお稽古に通います」

「供につれて行くなら朝弥がいいだろう。とにかく一人歩きはしてもらいたくないからね」

「ええ。分りました」

翌日から千弥は云いつけ通り内弟子の朝弥を連れて西川の稽古場へ通った。稽古とは云っても、昌三がほかの弟子たちに教えるのを片隅から見ていただけだった。

「退屈したら挨拶ぬきでお帰んなさい。気が向いたらまたいらっしゃい」

西川は千弥にそう云っただけで、稽古をするものしなないとも云わなかった。そんな日がおよそ二週間も続いて、弟子たちや西川家の人々も千弥の顔を見覚え、時折り話しかけてくるようになったが、当の西川は忘

れたように何も云い出さなかった。供をする朝弥が「お師匠さん、いつまでもこんなことを続けていらっしゃるおつもりなんですか。お能の先生ってずいぶん権高なんですね。お前たちなんか眼中にないって云うんでしょうか」と、美しい若師匠のために腹を立てたが、千弥自身は左内坂へ通うのがうれしく、西川が弟子たちにさもつまらなそうに教えている言葉の一つ一つ、体の動きを飽かずに追っていた。

その日も夕方すぎて弟子たちもあらかた帰り、いつのまにか西川も奥へ入ってしまったので、千弥が帰り仕度をしていると、ふらりと西川が戻ってきた。

「飽きずによく通いますね。この頃のうちの稽古場の雰囲気は妙なことになるんだそうだ。なに他の連中が云つてることなんだが」

「妙なことつて云いますと——」

「あんたが隅っこに坐りこんでいると、目障りなんだそうだ。いったい何をしに来てるんだというわけなんだろう」

「そんなのつてありませんわ。来たければ来てもいいつておっしゃったのは先生ですもの」

「……明日から花筐はなかまを始めますか」

西川がぼつんと云った。断るならその方がいいんだが、と云いたそうにもとれた。千弥は思わずぼつと頬を熱くさせながら、ぜひと云いかけると

「来月うちの方の月例会で、丁度それをやることになったので、僕も稽古をしなくちゃならないし、まあそんなことなんです」

「私は運がようございましたわ」

「さあどうかな」

珍しく滲むような笑いが西川の口許に浮んだ。千弥はこの男の笑ったのをまだ一度も見ることがなかった。その西川の笑いは、皮肉とも憐憫とも受取れるようなものだった。

「稽古が始まったら、お供はつれてこないでもらいたいな。浜村さんに僕がそう云ったと伝えて下さい」

彼は千弥にとも朝弥にともつかずそう云い捨てると奥へ入ってしまった。

次ぎの日から約束通り稽古が始まった。

「多分踊の方もそうだと思うが、能の舞もあらゆる無理という無理を体に強いて、人目には何もしていないように見えなくてはいけないんだ。水鳥が水の上に浮いているようなもので、波の上に漂っているように見

えるが、足は一刻も休まずに水を蹴っているようなものなんです。あんたも自分の弟子にはそう云っているでしょう」

「ええ……恥ずかしいですわ」

「僕は同じところは二度しか教えないから、覚えられなくても覚えるつもりで」

西川は紺がすりの着流しに扇をもって、楽に落した低声で花筐を誂いながら、磨きこんだ桧板の上を、気ままに動き廻るような摺足で舞ってみせた。千弥はその後について二度くりかえして舞いながら、投げやりに見える西川の所作が、一分の隙も狂いもないのに、怖れと嫉ましさを覚えた。

「じゃ今のところを一人でやってごらん」

西川は拍子盤を前におくと、ひゃあり、ひゃら、ひゃあと正歌を云いながら革の張扇を打った。別に気を入れていふふうでもなく、行儀わるく袖をたくしあげて、いたずらでもするように、ひゃあら、ひゃあと拍子盤を打っている。しかし床に立った千弥には、冴えてはね返る盤の音が、真つ向から眉間を打ってくるように感じられ、白い張扇が上下するごとに、額が熱く痺れて行くように思われた。

「最初のところで間違えたくせに、終りはちゃんと合
つていたね。つまり二度まちがえたんだ。あんたはそ
ういうお利巧さんだ。今のところをもう一辺」

西川はまた張扇をとって打ち始めた。千弥は数え年
四歳の時から踊を仕込まれてきた自分が、こんな筈は
ないともどかしがりながら、渋滞なく手足を動かすこ
とだけに精一杯だった。

そういう稽古が何週間か続いた頃、西川は

「じゃ今日はそこまで」と云ってから

「あんたはこういうことがよっぽど好きらしいね。踊
のほかに取柄のない人なんだな」

と投げ出すように云った。

「そうかも知れせんわ。踊のことしか頭になくて、
いつのまにか二十六になつておりました」

「へえ、もつと若いのかと思つた。二十六にしては自
分の踊というものを持つていないな。奇麗で素直とい
うだけじゃ仕様がな」

「勉強が足りなくて……」

「勉強なんてやめなさいよ。そういう妙な言葉を平氣
で使うあんたの神経がどうかしてるんだ。折角の器量
が台なしだね。——じゃ、また明日いらつしやい」

千弥が西川家の門を出たのは夕暮れ時だった。人通
りのすくない左内坂を降りて行くと、前方の横丁から
すつと出てきた黒い外套の男が、足早に坂を横切つた。
——おそらく西川は裏門から拔出してきたのだろう、
向側へ渡ると、そこに停つていた車の中へ消えた。う
すぐらい車の中には、女の横顔がほの白く待つてい
るのがみえ、すぐ窓掛がおろされた。

千弥は坂の上へ走り去る車の音を後ろにききなが
ら、いまの飴色の自家用車が坂の途中に停車してい
るのを、時々見かけたような気がした。まだ自家用車
の珍しい頃である。

「西川の方の稽古はどんなふうになっているんだ。お
前さんは一向に何も話さないじゃないか」

「別に変つたこともありません。とにかく一生懸命に
やっています」

「そりやそうだろうが、相手が西川の若太夫だから、
お前さんの方で氣を緊めてかからないといけないぞ」

千弥は父の心配が、芸のことよりも西川の素行上の
噂にあるのを知り抜いている。修平は稼業柄に似合わ

ず物堅い男で、平常から内弟子たちへの監督も厳しく、自身も妻を失つてから久しいが、謹厳な師匠で通つていた。娘の千弥に対する愛情も偏執なまでに深く、年齢の若さに比べて千弥の人氣が早く花開いたのは、不犯で芸に精進した賜ものだと信じていた。だから土地の老妓や分家の誰彼が、西川の噂をするたびに、千弥に釘をさすことを忘れなかった。

数えてみると千弥が西川のもとへ通いはじめてから、節分もすぎ、雛祭もすぎ、生暖い風が吹き初めていた。そのあいだ千弥は三日目に一度ぐらい、坂の途中に停車している車を見かけていた。いつかの昏れ方、西川がその中へ乗り込んだのを見てから、千弥は遠目にその銚色の大きな昆虫のような車体が、坂の片側に待っているのを見ると、大急ぎで目を伏せ、小走りに駆け抜けてしまうのが癖になった。

ある日、稽古が終ると

「今日はなかなかよかった」と、西川が真っ直ぐに千弥の眼を見て云った。

「自分で解るでしょう」

「さあ……覚えがわるいものですから、それに段々解らなくなつてまいります。こんな筈ではなかったと思

いながら、どう仕様もありませんの」

「あんたの方の発表会というのはいつです」

「五月の終りですが——」

「それまでにはなんとかなるかも知れない。やつてもらんなさい」

「でしたら嬉しいですわ。私は来年に延ばそうかと思つておりましたの」

「やつてみたらいい。しくじつても思い切つてやる方がいいんだ。あんたはいまそういう時期にいるんだから」

「それではおっしゃる通りに致します。帰つて父に申しましたらきつと大喜びですわ。じゃ私——」

「もうしばらく遊んでいらつしやい。親父の舞台写真がだいぶあるからみせてあげます。たしか花筐もあつた筈だ」

西川のところへ来てから、ひきとめられたのは初めてだった。むろん千弥にとつて嬉しくない筈はないのだが、さい前ここへ来る時、例の車がひつそりと待っているのを千弥は見ていた。

「お邪魔をしてもよろしいんですの」

「帰つてもらいたければ帰つてくれと云いますよ。何

かあんたの話を聞こうか」

「私の話なんてつまりませんわ」

西川がどさりと机に置いた分厚な写真帖をあいだに
して、見るともなく話すともなく、二人のあいだに時
が経った。千弥は西川と近々と対座していることの暖
かさにほぐされながら、外の車が気になっていた。も
しかしたら西川は、何か理由があつて時を引延ばして
いるのだろうかとも思った。

「女の人は何かというと自分のことをしゃべりたがる
もんだが、あんたは珍しく云わない人だね」

「なんにもないからですわ」

「……どうして結婚しないんです」

「どうして……困りますわ」

「もっとも、あんたみたいな人を嫁にもらつたら男は
一生の不作だね」

「もらつてやろうと云つて下さる人もございまして
よ。みくびつていらつしやるわ」

「そりゃよつぽど気の好い男か、でなければ物欲しそ
うな田舎者なんだ。僕は見なくても解るよ」

「じゃ先生はどうして奥さまをお迎えになりません
の」

「考えたこともないな。面倒なことはきらいだし、あ
んたの前で云つてはなんだが、女の人は退屈だよ。う
ちの連中は嫁をもらわないと、流儀の跡目がなくなる
なんてやかましく云うけどね、それも厄介だから放つ
とくんだ」

「……先生つて、私と話をしていraftしやいますけ
ど、本当は誰か別の人に話しかけていraftしやるよう
に見えますね」

「へえ！ あんたがそんなことを云うとは思わなかつ
た。別の人間なんていないよ。じゃ別の誰かつて誰だ
と思うの」

「私を知るわけがありませんわ。それにもしかした
ら、それは人ではなくて、何か遠くの方の何かなのか
も解りませんし——」

「奇妙なことを云うんだね」

西川の眼がふつと笑つたと思うと

「ところでもうお帰んなさい。僕はねむくなつた」

「それでは明日また——」

明りを持った書生が玄関に待つていて、千弥は門ま
で送つてもらつた。くぐり戸を出ると雨催いの坂道は
一層くらく、もう人通りも絶える時刻だと思われた。

心持うつむいた急ぎ足になつて坂を降りて行くと、いきなり千弥は強いヘッドライトを真つ向から浴びせられた。思わず体を退いて光をさけようとすると、彼女の動く方へ光も移動した。千弥は光に目をあけていられなかったが、車があの自家用車だということは疑うべくもない。まだそこに停つていて、西川家の門を出てくる者を見とどけるための、この有様かと思うと、千弥は光の帯に掴まれながら、ことさらゆっくりとその中を通つた。

坂下でタクシーを拾うと、千弥は急に動悸がした。ぎらぎらと金色の二つの眼から、執念深く睨まれ、顔を覚えられたのは、迷惑でもあつたが氣味がわるかつた。それにしても、西川が今夜に限つて自分を長居させたのは、あの待人に当てつけるための、か、い、ら、い、に使われたのだと思うと腹立たしかつた。しかしその腹立たしさは、彼女自身への不思議なものでかしまに變つた。あの車の主から、ああまで憎まれるような理由のない自分が、稚いあわれなものに感じられたのである。

四月に入ると千弥の明け暮れはひどく忙しいものに

なつた。発表会が五月の終りと決まると、洪水のように押しよせる雑事や人の出入り、何よりも新作舞踊の工夫には精魂を傾けねばならなかつた。

その日も千弥は慌しい時間のあいまをくぐつて、西川昌三を訪ねた。しかし彼は千弥を見るなり

「もう来る必要もないと思うな。ここでの稽古はこの辺までなんだ。あとは君の工夫だけだ。僕の顔をみたつていい考えは浮ばないよ」

「まだ全然手さぐりで心細いんですの」

「僕の知つたことじゃないさ。教えるとか教わるとかいうことはそんなものですよ。僕の稽古は昨日でもう終つたんだ。今日はもう先生でもなんでもない。長々どうも御苦労さん」

西川のすることはいつもこの調子だと知つていたが、千弥はまだ何か云いたい。

「それではいづれ改めて御挨拶に伺いますが、発表会にはいらしつて下さいますか」

「うん。その前にうちの例会で花筐をやるから、それを見て仕上げをすればいい」

「そうでしたわ！ もう一度お目にかかれるんでしたわ」

「なに云ってるんだ。さ、出かけよう。僕も行くところがあるんだ。途中まで送ってあげる」

西川と一緒に外を歩くのは初めてだったが、門を出てどれほども行かぬうちに、男の早い足に従いて行きかねて、千弥は次第に距離のひらいて行く西川の後姿をみているばかりだった。これで送ってあげるものもないものだ、千弥は半ばあきれ噴き出したいような気持で坂を降りて行くと、西川はふっと左の横丁へ曲ってしまった。ともかくその曲り角まで行ってみたが、むろん西川の姿は、どこへ行ったか分る筈もなかった。

「浜村さん」

うしろから声をかけられてふりかえると、久しい顔馴染の布川教授だった。

「このあいだはどうも失礼した。わざわざ拙宅までお出向き頂いて」

「いいえ。御面倒なお願いを申し上げます」

「とんでもない。若師匠の新作舞踊の作詞を依頼されたのは僕にとって二重の光栄だ。あの晩から早速準備に入ってますよ」

布川教授は江戸文学を専攻する学者で、舞踊家たちのあいだでは、新作ものをとりあがる場合に、作詞を

依頼してまちがいのない人という定評があった。

立話も出来ないからと誘われて喫茶店へ入ると、布川教授はにんまりと笑って千弥の顔を眺めた。

「あの花筐という曲は単純だがいいのですよ。若師匠があれをテーマにしてどういう踊を見せてくれるか楽しみだ。あの女主人公が男を慕って物狂いになるところが見ものだが、あんたのような、男に恋の苦しみを与えることはあっても、苦しめられたことのない人が、どういう表現をするかと思っているんだ」

「私には解らないだろうっておっしゃりたいんですよ。解ってますわ。男の体と心を知ってるだけではなくて、自分の女というものを体と心で知り抜いた女なんでしょう」

「それは何かの本で読んだ言葉を使っただね。ちゃんとあんたの顔に書いてある」

布川教授は面白そうに笑ってから

「ところであの噂を知ってるの？」

「あの噂ってなんですか」

「あんたと左内坂のさ。いまでも訪ねて行った帰りだらう」

「西川先生と私が……なんだって云うんでしょう。そ